

晶上で凍結の際結晶方向が変化する問題、圧融に関する研究、Beckmann (フランス) の氷晶の成長及び昇華の研究、及び筆者の雪結晶習性機構の2つの問題点に関して新しい機構を提案したもの等が気象に関係したものであった。その後のセッションは“クラスレート、立方晶

系及び高密度の水”、“宇宙の水”、“微物理化学Ⅰ及びⅡ”等であった。宇宙の水の問題は彗星の尾の発生等で議論されたが、バンクェットの後でJPLのT.V. Johnson博士が“氷結した外部太陽系”と題した講演の中でみせたすばらしい惑星、ことにその衛星の写真が印象に残った。



安井春雄・船津康二・
田辺久之 著

静岡県のお天気

静岡新聞社、昭和57年4月刊、B6判、254頁

今年も異常気象の年として経過しているが、気候変動的にもその傾向が顕著になっている。また、1981年に更新された平年値の以前の値との比較を見ると都市気象としての人工要素も認められる。今後の展望は、気候変動対策室の動きに注目すると同時に、各自が気象言い換えれば生活環境の変化に敏感になっていく必要があると思う。至近な例を上げれば、鮮明な虹色の見事なハロー(内かさ)が昨年(5月15日)、一昨年(7月12日)と長時間にわたって柏で観測された。恐らく、多くの人がこのすばらしい大気光象に思わずみとれたに違いない。いや、素朴な自然観察を愛する人こそそうであったかも知れない。実際に60才になる御婦人から電話で問い合わせがあり、分かり易く自然の理を話すと、はじめて見たと感動しながら礼をいった。解説の妙味である。よく見る彩雲のうち、鮮明な美しさを受する人々がいた時代には、国の年号が変わったことさえあるのである。換言すれば、自然を(奥深く)見る眼を養いたいものである。著者が言っているように「静岡県は確かに気候温和地ではあるが、同時に気象災害の多発地域でもある」と訴え、まず己を知らんと幅広い静岡県の気象の特徴を余す所なく紹介している。前段に私見を書いたのは、この本を読み終えて抱いた偽らざる心情だからである。現に今年台風18号が御前崎に上陸し、かなりの被害を出した。

全体を通して、季節別に景物(けいぶつ:春夏秋冬それぞれのながめ)を取り上げ、例えば春18, 夏19, 秋17, 冬14, 計68件紹介し、前後に静岡県の気象の特徴、気候表を付けている。適所適所に俳句を入れて、季節暦であると同時に歳時記の色をつけ、なんといっても気象用語の説明がわかり易く適格で拾い読みしてもおもしろい。例えばブロッケン現象を見るとドイツの標高1,142mの

ブロッケン山の頂上でよく見られることからこの名が付いたと詳述されている。索引をつけてくれているので便利である。また20項目ほどの一口メモを途中にはさんでいておもしろいが、これは目次、索引にも見当たらないのでピックアップしておく。

P.25 予報適中率、標高日本一の富士山測候所; P.32 春ならい雨、秋ならいは天気直し; P.50 雨の強さ; P.60 身の周りの温度; P.66 宇宙からの気象観測; P.69 降水確率予報; P.75 ブロッキング高気圧; P.78海底地震計; P.96 アメダス; P.99 北鳴りや平気で西鳴りこわい; P.151 いぬいフジは雨、伊勢フジは晴; P.172 お天気と交通事故; P.178 スポーツに対する気象の影響; P.190 富士山のよく見える日; P.210 ジェット気流; P.222 異常気象; P.225 相模やならいで石廊崎や西よ間の下田はだしの風; P.234 天城と御厨の私雨; P.240 三保の松原で日本最初の飛行機観測;

平年値を中心に、統計表を巧みに使って、全国との比較における静岡県として位置づけると同時に24節気の感覚もつちかひながら生活気象たらしめている。

最後に、南九州よりも暖かい伊豆半島を含み、北には日本最高の富士を仰ぐ静岡県の風土を気象と合わせて読んでいくうちに次のような大パノラマが思い浮かぶのである。伊豆半島がフィリピン沖から北上したプレートで本州と衝突して出来たもので今なお押し続けているという事実である。そのために、ハの字型の湾曲した北、中央、南アルプス及び丹沢山系を形成し、富士山、箱根の火山を作り地震活発な所でもある。すなわち、生きている大地を持つ静岡県は、地球科学からも気象学からも興味のある所なのである。但し、地震についてはほとんど触れていないが、富士山の記述は細かい。私も富士山に3回登ったが、その都度旗雲、吊し雲、笠雲を見、天気変化との相関を確認した。その笠雲の種類の図が掲載されている。いくぶん読みにくい所もあるが、確かに静岡県の風土をよく知るためあるいは気象の知識を広めるための座右の書になりうる。

(池田 学)